

都道府県・ 指定都市番号	6 7	都道府県・ 指定都市名	熊本市	研究課題番号・校種名	2 (4)
				領域名	E S D
研究課題	学校全体で取り組む研究課題 (4) E S D を学校全体で体系的に推進するための教育課程の編成, 指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
学校名 (児童・生徒数)	<small>ふりがな</small> 熊本市立北部中学校 (6 5 0 人)				
所在地 (電話番号)	〒861-5521 熊本県熊本市北区鹿子木町 1 番地 (096-245-0002)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.kumamoto-kmm.ed.jp/sch/j/hokubujh/				
研究のキーワード グローカル 委員会活動 E S D カレンダー 「E S D 学びの地図 (キャリアマップ)」 N I E の活用 I C T × 教育					
研究結果のポイント <ul style="list-style-type: none"> ○ E S D を通して, 教科横断的な指導計画を整理し, 総合的な学習の時間を中心として教科等の指導方法の工夫改善を行ったことで, 生徒・教師ともに, 学習の目的を明確にした取組を確認することができた。 ○ 学校を核とし, 校区内小学校, 地域全体に向けた E S D の浸透を進めることができた。 ○ E S D で育成する資質や能力育成の実現状況をはかるための, 評価の工夫と, 評価を基にしたアプローチの準備を行うことができた。 					

1 研究主題等

(1) 研究主題

人とつながる 社会とつながる E S D

～地域連携を踏まえた, E S D による指導と評価の工夫改善～

(2) 研究主題設定の理由

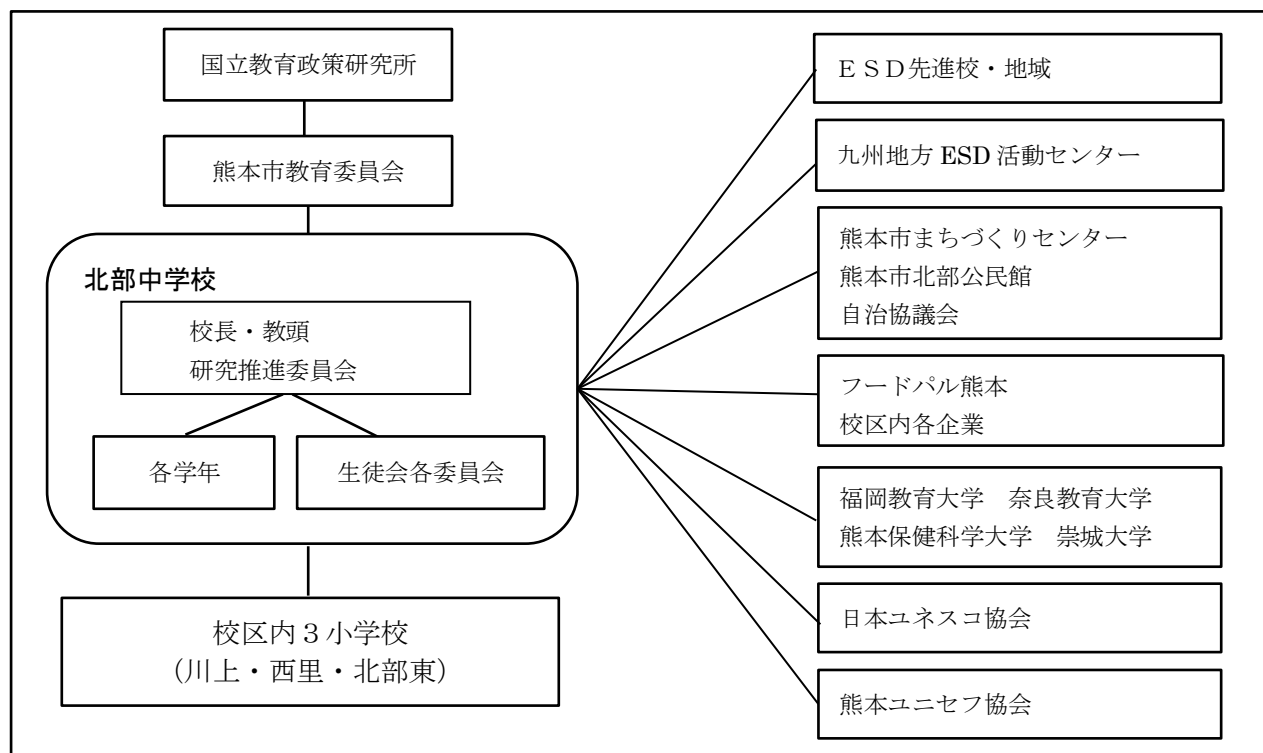
本校は, 生徒指導の困難校から脱却しつつも, 不登校生徒の出現率が高い状況にある。そのような状況下で, 「花のある学校 文化のある学校 学び合いのある学校 これらが地域とともにある学校」を本年度の学校教育目標に掲げ, 「徳・知・体」の調和のとれた人づくりを目指した教育を実践している。教師集団は指導力や次世代の教育の在り方について学ぶ意欲が高く, 研究の機運が上がっている。その結果, 最近では, 行事や部活動等に積極的に取り組む生徒が増え, 学校全体として落ち着きも生まれてきた。

ただし, その一方で本校の生徒は, 与えられた課題に対しては真面目に取り組むことができるが, 自ら考え, 実践していくことを苦手としている生徒も多く, 中には将来の目標をもつことができず, 学校生活全体に意欲的に取り組めない生徒も見られる。

また, 校区には行政機関の熊本市まちづくりセンター, 大学として崇城大学, 保健科学大学を擁し, 産業機関として, 市民交流型の食品工業団地「フードパル」や産業ロボットの製造会社があり, 農業等も盛んで, 産業教育を学ぶ環境も整っているものの, 連携や活用が十分できるとは言い難い。

そこで, 学校が核となってこれらの教育的リソースを結び付け, E S D に組織的に取り組むことで, 本校の「学びの姿」を, 生徒・保護者・地域が理解, 共有できる「E S D カレンダー」や「キャリアパスポート」を示し, 地域とともにある学校づくりを行いたいと考えた。また, そのような E S D を通じた地域の産学官の連携によって, 教師の教育実践力を高めるとともに, 生徒自身に地域の将来, さらに自らの将来を考えさせ, 主体的・協働的な学びを促したいと考えた。以上のような研究主題設定の理由を本研究の目標として定めることで, 熊本市において E S D 周知を図るとともに, 次世代教育を担う実践校としての先導的な役割を担っていきたい。

(3) 研究体制



(4) 1年目の主な取組

平成30年度	4月	研究推進委員会発足
	5月	職員のESD研修開催 ESD導入授業, 授業研究会+講師講話 (大牟田市教育委員会 荒木指導室長)
	6月	校区内保幼小中連携事業を兼ねてESD導入授業+講話 (文部科学省 濱野視学官)
	7月	「アフリカ子どもの日」 事前訪問・講話 (マリー・ルイズ氏) 夏季研究推進委員会 (ESDカレンダー キャリアパスポート)
	8月	職員のESD研修 (福岡教育大学 石丸教授) 大牟田ユネスコスクール発表会への参加 (職員7人) タブレット, 電子黒板導入に於ける職員の研修 (熊本大学 前田准教授) 中国重慶市より訪問, 交流 職員研修 2学期以降の取り組みについて (研究部より) ・生徒会委員会活動 ・ESDカレンダー ・キャリアパスポート ・評価
	9月	職員のNIE研修 (熊本日日新聞社 読者NIE担当者より) 生徒向けのNIE学習会 (熊本日日新聞社 読者NIE担当者より)
	10月	全校生徒に向けた後期生徒会委員会活動説明会の開催 寝屋川第十中学校 ESD研究発表会への参加 (職員4人) 民間教育研究機関のモニターとして評価への参加 (1, 2年生)
	11月	シンポジウム「北部の未来を考える」の開催…シンポジスト (熊本副市長 熊本市民生員理事 SDGs推進企業代表 生徒3人) 職員授業研修 英語×ESD
	12月	職員研修「来年度のゴールとこれからの取組」 職員研修「第1回 ESDティーチャーズプログラム」 (奈良教育大学 中澤准教授)
	2月	くまもとSDGs・ESD研修 (九州地方ESD活動支援センター) への協力 職員研修「第2回 ESDティーチャーズプログラム」 ・社会、道徳、理科の授業→授業研究会+指導 (奈良教育大学 中澤准教授 + 福岡教育大学 石丸教授) ICT研修 (文部科学省 ICT活用教育アドバイザー 平井聡一郎氏)

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

① ESDを軸とした学習過程，学習指導の工夫改善

「持続可能な社会の構築を目指して，自立的に考え，行動する力を養う教育」を目指した，教科横断的な指導計画を整理し，教科等の指導方法等の工夫改善を行う。

② 学校を核とした地域全体での ESD の浸透

本校を核として，校区にある小学校，熊本市まちづくりセンター，大学，産業機関などと連携しながら，地域全体での ESD の浸透を目指す。

③ 妥当性，信頼性のある評価の工夫

ESD で育成する資質や能力育成の実現状況をはかるための評価の工夫を行う。

(2) 具体的な研究活動

① 本校の実態に即し，ESD を軸とした学習課程，学習指導の工夫改善

- ・生徒，保護者，地域にも分かる，学習課程の工夫
→総合的な学習の時間と各教科等のクロスカリキュラムを ESD カレンダーによって可視化，整理するとともに「ESD 学びの地図（キャリアマップ）」を作成する。
- ・生徒の変容を見取る評価の工夫及び，指導改善
→学習フレームとしての「批判的思考」「創造的思考」「協働的思考」という視点を授業の中に組み込む。
- ・関係機関と連携した ESD に関する研修の実施及び教員養成
→上掲の「1 (4) 1 年目の主な取組」に示した機関，講師からの指導，情報提供により，教職員の継続的な意識喚起を促す。
- ・生徒会活動の委員会活動と連動した取組
→総合的な学習の時間に委員会活動を位置付ける。（生徒会委員会活動説明会の開催）
→それぞれの委員会が SDG s のゴールを見据え，活動を考え，実践に結び付ける。
- ・NIE の活用による情報の収集，活用の仕方の研修及び校外へ向けた情報発信
→全校生徒に向けた，新聞の読み方，活用の仕方の学習会を開催する。
→各学年「NIE コーナー」を設置する。
→朝自習の時間を利用した，新聞からの情報の取り出し方の学習を行う。
- ・タブレット，電子黒板及び映像提示装置の活用（ICT × 教育）
→ドリルパークを活用した朝自習でのドリル学習を行う。
→朝自習でタブレットを使って新聞を読む。

② 学校を核とした地域全体での ESD 浸透

- ・ESD コーディネーターによる教育プログラムの作成，実施
→まちづくりセンターの協力による，ESD に関するシンポジウムを開催する。
→生徒会の代表と，地域の民生委員，PTA との意見交換会を実施する。
- ・校区内大学（崇城大学・保健科学大学）との連携
（今後，委員会活動を中心に，工業，環境，医療等の分野で，専門的な立場から授業に参加してもらい，総合的な学習の時間等の指導の充実を図る予定。）
- ・熊本ユネスコ協会等の協力によるグローバルな視点の共有
→「アフリカ子どもの日」の事前訪問，講演開催を行う。
- ・「くまもと SDG s ・ ESD 研修」（九州地方 ESD 活動支援センター）への協力予定

③ 妥当性，信頼性のある評価の工夫

- ・生徒の変容を見取るための学校独自の ESD ルーブリック評価の工夫
- ・検証改善サイクル（PDCA × 3）の実施
- ・民間教育研究機関の調査のモニターとして評価の実施（1，2 年生）
- ・全国学力学習状況調査等の経年比較・学校主体の評価（自己評価）
- ・学校関係者評価・教職員の能力評価及び業績評価 などの活用

(3) PDCA サイクルへの取組について

ESD を通した教科等横断的なカリキュラムや，学校・地域全体での活動の検証として，今年度は 4 月，7 月，12 月，3 月に調査を行う。本校の主な PDCA サイクルの取組は次のとおりである。

【P】生徒に身に付けてほしい資質・能力の設定（7 つの力）と校内体制づくり。

【D】全校体制による実践

- ・上記「2(2) 具体的な実践活動」の①, ②の実践

【C】生徒の変容を見取る評価の実施

- ・E S D意識調査(年3回, 学期ごと), 学校の評価(自己評価)及び学校関係者評価, 民間教育研究機関のモニター調査での評価(10月実施)

【A】調査結果を基に検証を行い, 目標の見直しや取組の改善等についての検討

- ・カリキュラムデザインとE S Dカレンダーの再検討, 指導体制やI C T活用などの諸条件の整備・活用, 地域の資源(6つのM)の活用拡大, 校務分掌の見直し(年度内変更有), 教科等の枠を越えたチームづくり

本校では, 身に着けたい7つの力を基にして, 18項目のアンケート調査を行っているが, ここでは, その中の検証改善P D C Aサイクルに該当する項目である2項目を例示し, その結果を示す。

① 身の回りの出来事を様々な側面や立場から考えている。

「当てはまる」「少し当てはまる」の値は, 1年では4月55%→12月63%, 2年では4月26%→12月48%, 3年では4月35%→12月53%と, 全体で20ポイントほどの上昇が見られ, 新たに知った世界の現状から, 広い視野で物事を見る姿勢が育ちつつあることが分かる。

② 地域のことにすすんで参加している。

この項目に関しては, 各学年とも4月~12月の変化があまり見られず, 低いポイントのまま推移している。時間的な原因も考えられるが, 今後, 「社会とつながる」という本校テーマも考慮しながら, 取組の工夫について考えていきたい。

3 研究の成果と課題 (○成果●課題)

- E S Dを軸とした教科横断的な発想で学習活動を計画することで, 生徒・教師ともに, 学習の目的や, 教科等の関連性を確認し, E S Dの意識を明確にした学習を行うことができた。
- 総合的な学習の時間の中に委員会活動を位置付け, 生徒全員がS D G sに関連した活動を考え, 実践に結び付けようとしたことで, 生徒のE S Dに向けての意識が深まった。
- E S Dに関連したシンポジウムや地域との交流会を開くことで, 学校を核とし, 校区内小学校, 地域全体に向けたE S Dの浸透を進めることができた。
- E S Dで育成する資質や能力育成の実現状況をはかるための, 妥当性, 信頼性のある評価と, 評価を基にしたアプローチの準備を行うことができた。
- 創造的思考には, 情報をつなぎ, 新たな解決策を生み出す能力が必要だが, 情報の活用や応用する能力・態度の育成が課題となってくる事が分かる。(⇒民間教育研究機関の調査結果, 各学年・各分野ともAの値になる生徒はほとんどいない。また, 批判的思考・協働的思考のスコアが比較的高く, 創造的思考のスコアが低くなっていることから。)
- 現在, E S Dカレンダーのカテゴリー分けを, S D G sの観点と, 身に着けたい7つの力の2観点から作成しているが, 教科ごとの差があり, 本校独自のカテゴリー分けを再検討する必要があると感じている。
- 総合的な学習の時間に位置付けた委員会活動だが, それぞれの委員会が探究となる学習活動を構築していく難しさがある。
- 総合的な学習の時間としての委員会活動と, 特別活動としての委員会活動がクロスしていることから, その教育課程の明確化, 及び評価の検討が必要となる。
- 本校独自の評価を, G P Sアカデミックと併用しながら, ルーブリック評価を視野に入れ, その改善を検討していく。

4 今後の取組

- 本校研究テーマ「つながる」ことを意識した, 学校全体, 各学年, 各委員会で, 持続可能な学習活動を検討し実践に結び付ける。(研究発表会は2019年10月18日予定)
- 総合的な学習の時間と各教科等の横断的なつながりを再考し, E S Dカレンダーの検討をし, 活用できるものとする。
- 新しい時代(2050年)に活躍する生徒たちに, 世界とつながる活動の意義と必要性を理解させ, 必要となるその資質・能力を育成する。
- 将来の生き方(キャリア教育)につながる, E S Dの再検討を行う。